

もくじ 古記録と地域美術資料 1P 次回企画展・作品展紹介② 2P  
 新発見の三代歌川豊国筆・肉筆浮世絵 3P

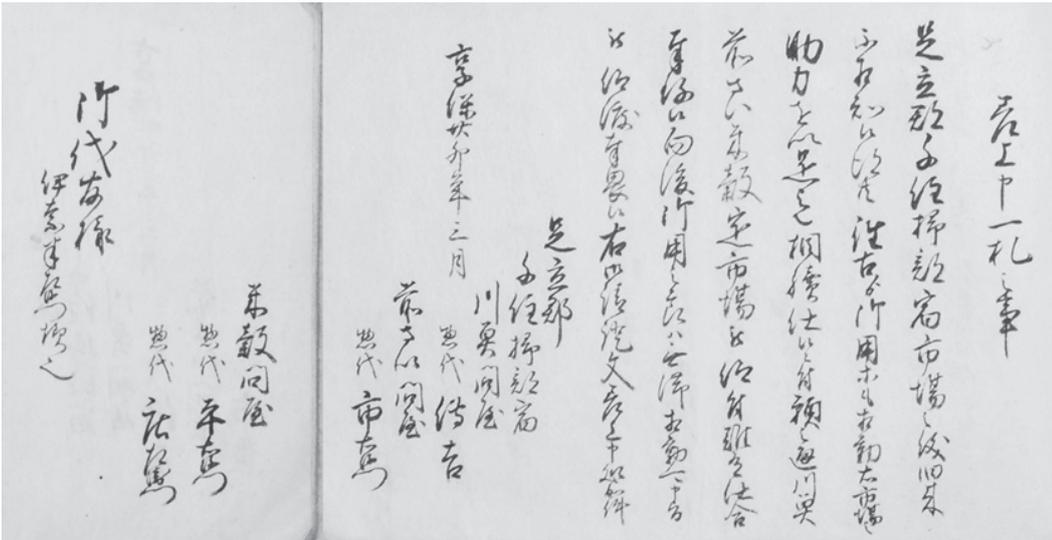
# 足立史談

第565号

2015年3月15日

足立区教育委員会  
 足立史談編集局  
 足立区立郷土博物館内  
 〒120-0001  
 東京都足立区大谷田5-20-1  
 TEL 03-3620-9393  
 FAX 03-5697-6562

〈26-308〉



享保20(1735)年  
 千住掃部宿市場請書写  
 千住の市場が幕府の御用市場と  
 なったことを示す古文書「旧書留」  
 (当館蔵・石出家文書)所収

## 古記録と地域美術資料

—千住掃部宿の石出家資料—

多田文夫

■御用市場の町千住 千住市場や「ちやば」は江戸時代からの伝統を誇る。その歴史を物語る資料の一つに享保二十(一七三五)年の「千住掃部宿市場請書」がある。幕府の御用市場となったときの古文書である。石出家(千住仲町)寄贈の石出家資料中の「旧書留」にその記載が見出された。

### 差上申一札之事

足立郡千住掃部宿市場之儀、旧来不相知候得共、往古より御用等も相勤右市場之助力を以、是迄相統仕候二付、願之通、川魚前さい米穀定市場被 仰付難有仕合奉存候、向後、御用之節ハ無滞相勤可申旨、被仰付奉畏候、右御請証文、差上申処如件、

足立郡  
 千住掃部宿  
 川魚問屋  
 惣代 伝 吉  
 前さい問屋  
 惣代 市右衛門  
 米穀問屋  
 惣代 平右衛門  
 惣代 庄左衛門

御代官様  
 伊奈半左衛門様也

※傍線部分に「むかしのことは判ら

ないが、古くから御用もつとめていた」と延べ、川魚、前裁(青果)、米穀の三問屋が御用市場となったことが記されている。ちょうど今から二八〇年前、千住は江戸城を支える市場の町となったのである。

### ■七八年ぶりの確認

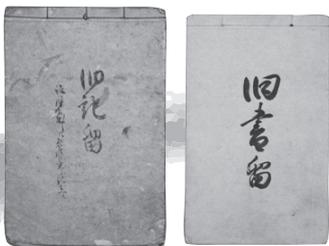
この千住のやちやばの成り立ちを示す古文書は、昭和十二(一九三七)年に当時の経済史学者であった鈴木直二がその著書『徳川時代の米穀流通組織』に紹介して以来、長く実物資料を見出す機会は失われていた。

今回、紹介した資料は、古文書整理中に見出された小横帳(小さな手控え帳簿)である。「旧書留」二冊のうちの一冊に記載されていた。一冊目の「旧書留」は古記録を筆写した帳簿で他の収載文書から寛政元(一七八九)年頃の成立と推定できる。もう一冊の「旧書留」には同請書前後の記録も記載されている。

### ■千住宿の好記録

二冊の「旧記留」には、千住宿のさまざま

まな事象が記録されている。御用市場になる前の正徳三(一七一三)年から川魚の「活鮒御



2冊の「旧記留」



狩野常信「東方朔図」  
石出家寄贈当館蔵

用」があつたことや、寛保三(一七四三)年に貫目改所が千住一丁目に設置されたときの触書などが記載されている。活鮎御用は、これまで知られていない川魚御用の記録であり、貫目改所の触書も史実としては知られていたが、千住の地元資料としては初出となる。

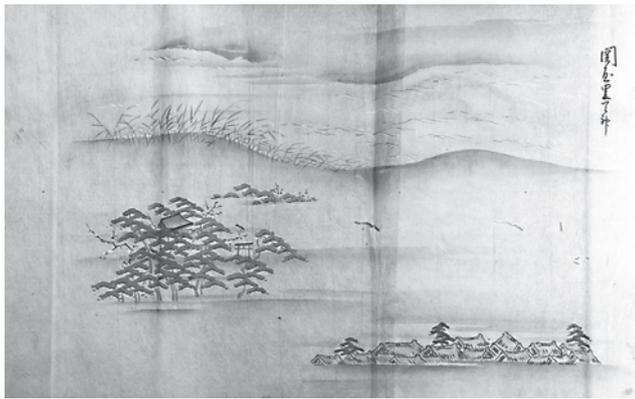
これらのことから、千住宿や千住市場のことを明らかにする上での好資料と評価できる。

■木挽町狩野家の資料

石出家から

寄贈された資料群の中には、こうした古文書のほか、木挽町狩野家系統に属する軸装絵画が含まれていた。

昨年から今年にかけ、美術史の専門家に依頼し評価等を行っている。右に掲げた狩野常信筆「東方朔図」や絵師が利用した粉本、模本類が確認された。中には「関屋里天神」と題された狩野典信の図も含まれていた。狩野派の絵師が関屋天神を描いた事例は、現在まで確認されておらず興



狩野典信 関屋里天神の図

味深い資料である。描かれた場所は、いわゆる「元天神」という現千住関屋町にあつた関屋天神である。こうした千住の歴史と地域の美術資料群について、現在新たな確認が続いている。折にふれ、今後もご紹介していきたい。

(郷土博物館学芸員)

次回企画展・出展品紹介②  
版本の世界

— 娯楽・教養・挿絵の美 —

佐藤 貴浩

当館では、四月二十八日から「版本の世界」展を開催する。前号では、出展予定の資料二点を紹介した。今号でも引き続き資料紹介をしたい。版本とは、木版・活版などを用いて印刷したものをいう。「版本の世界」展では、版本を中心に展示することは言うまでもないが、手書きされた本、すなわち写本も展示する予定である。今回はその写本の中から、手

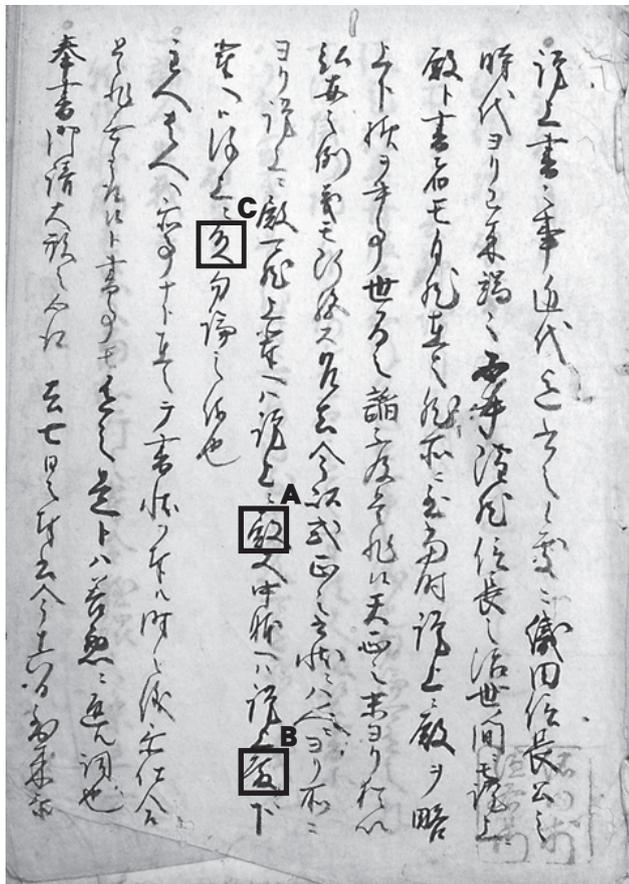


図1

紙や公文書といった文書の書き方について記したものを紹介したい。我々が手紙などを書く際に気をつけることは、字をきれいに書くことや、決められた書式をまもることなどがあつたろう。前者については心がけ次第でどうにかなるが、後者についてはなかなか難しい。例えば、「手紙を書く場合には、「前略」・「拝啓」・「謹啓」などの頭語と、「早々」・「敬具」・「謹白」などの結語の対応関係、「早春の候」・「春寒の候」・「孟春の候」などの時候の挨拶などを適切に使いこなす必要がある。しかし、こうしたマナーを間違えると、教養のない人と思われてしまうだろう。そうならないために書店でマナー本を

購入した人も多いはずだ。

船津家文書の中に、表題が不明のため旧家に伝来した仮題で「書札礼」と名付けられた写本がある。書札礼とは、文書を書く上での礼儀作法のことで、本書は六二頁にわたって、それが記されている。まさに現代のマナー本である。

図1は、「書札礼」の最初の頁である。ここには、織田信長の時代から書札礼が変化し始めたことなどが書かれているが、注目したいのは、ABCで囲った文字である。これは、すべて敬称の「殿」という字である。Aはほとんど崩しておらず、Bはやや崩れており、Cは完全に崩れている。言い換えると、Aは丁寧、Bは普通、Cは殴り書きということになる。実

は、図1の中央部には、「殿」の使い方が書いてあり、「上輩」(目上)にはA、「中体」(対等な関係)にはB、「下輩」(目下)にはCを使うようにと書かれている。つまり相手との身分関係によって、字の書き方を変えているのである。

次に図2をみて欲しい。これは相手に贈るものを記した「目録」の書き方である。冒頭に「進上」「御太刀」「御馬」の文字を並べて書くことが書いてある。つまり文字の位置関係を定めている。特に注目されるのは、文字の間隔をあける具体的な数値まで記されていることである。例えば、「御太刀」と「以上」の間には「此間三寸六分」と記されている。少し細かす

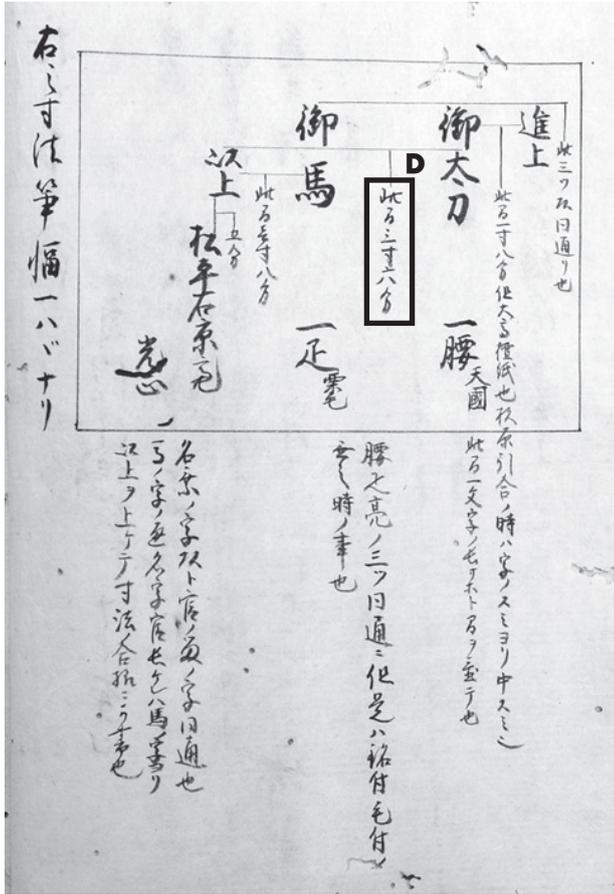


図2

ぎる気もするが、それだけ書札礼に対する意識が高かったということが言えるだろう。

こうした書札礼は、武家にとつては極めて重要な問題で、上杉謙信と北条氏康の間では、書札礼をめぐる外交問題が起きたこともある。それは、「殿」の書き方でみたように、書札礼が相手との上下関係を可視的に表現してしまうものだったからだ。

さて、船津家文書の中に、書札礼に関する本が残されているのは非常に興味深い。「書札礼」は、おそらく船津家の人間が書写したものであろう。しかし、「書札礼」の内容は、武家文書の書き方に関するものであって、一般庶民にはほとんど意味を持たない。にもかかわらず、こうした本を書写したということは、実用性から書写したというよりも、むしろ教養の一種として書写したものと考えられる。

江戸時代には、往来物と呼ばれる一般庶民の読み書きに関する版本が数多く出版されており、一般庶民にとつても文書の書き方は重要な関心事となっていた。武家の書札礼が書写されたのは、その延長線上のことであろう。ここから、江戸時代の多彩な教養の一端を知ることができる。とともに、足立の人々の教養の深さに驚かされるのである。

(郷土博物館専門員)

◆◆◆◆◆  
浮世絵展「歌川派と歌舞伎」  
桜まつり期間限定展示！

◆◆◆◆◆  
新発見の三代歌川豊国筆・  
肉筆浮世絵

小林 優

二月十日より、郷土博物館では役者絵にスポットを当てた浮世絵展「歌川派と歌舞伎―勇壮なる役者絵の世界」を開催しています。役者絵の基礎を構築した鳥居派や勝川派から、江戸後期の役者絵界を席巻した初代歌川豊国、三代豊国(国貞)、国芳ら歌川派絵師の作品を軸として約六十点の作品を展示していますが、博物館の桜まつり期間、三月二十八日(土)～四月六日(月)の期間限定で、区内の方よりご出展頂いた三代歌川豊国の筆による新発見の肉筆浮世絵《足利光氏図》を展示します。

■肉筆浮世絵とは 葛飾北斎や歌川広重といった「浮世絵師」と呼ばれる専業絵師によって描かれる「浮世絵」は、絵師が描いた版下絵を版画の技法で摺りあげる「浮世絵版画」と、絹や紙といった媒体に絵師が直接描く「肉筆浮世絵」の二種類に大別できます。

前者が比較的安価で、大量生産によって不特定多数の購買者に求められたのに対し、後者の肉筆浮世絵は、



三代歌川豊国(国貞)《足利光氏図》  
絹本着色 弘化～元治(1844～64)頃

絵師の手作業による一点物であるがゆえに希少性が高く、現存数は浮世絵版画に比して必ずしも多くありません。菱川師宣の《見返り美人図》(東京国立博物館蔵)などは、この肉筆浮世絵の象徴的な一作と言えます。宝永～正徳(一七〇四～一六)の頃には、懐月堂安度の率いる懐月堂派のように、肉筆浮世絵の大量制作に特化した一派も出現しますが、いずれにせよ、彫師・摺師の手を経て絵師の線描や色彩が構築される浮世絵版画と異なり、絵師の生きた線描や色彩感覚を垣間見ることができなのが、肉筆浮世絵の特筆すべき点と言えます。

今回、期間限定で展示するのは、三代歌川豊国(国貞)による新発見の肉筆浮世絵で、三代豊国が挿絵を手がけた戯作者・柳亭種彦の読本『修紫田舎源氏』(にせむらさきいなかげんじ) (一八二九～四二年刊行)の主人公・足利光氏を、役者の似顔で描いたものと推測されます。

■三代歌川豊国(国貞)と源氏絵

三代歌川豊国(国貞、一七八六～一八六四)は、初代歌川豊国が作り上げた役者絵の名門としての歌川派の流れを引き継ぎ、幕末にかけて浮世絵界の大黒柱として活躍した絵師です。十代半ばで初代豊国に入門して国貞を名乗り、役者絵で頭角を現して、弘化元(一八四四)年に二代豊国(豊重)を押しつけて豊国(三代)を襲名しました。

氏が、好色を装いながらお家騒動を解決するという『修紫田舎源氏』はそのストーリーもさることながら、各ページに大きく描かれた三代豊国の挿絵が話題となつて人気を博しました。

三代豊国による『修紫田舎源氏』の挿絵はこの後、一枚摺錦絵の形で改めて販売されて人気を博し、江戸の浮世絵界に「源氏絵」という新たな分野の創出と、そのブームをもたらしたのです。

また、『修紫田舎源氏』挿絵の影響はそれだけに留まらず、天保九(一八三八)年以降、次々と上演された「内裡模様源氏紫(しよもようげんじ)のえどぞめ」、「源氏模様娘雛形(げんじもようふりそでひながた)」といった『修紫田舎源氏』を脚色した歌舞伎は、三代豊国の図像を土台として足利光氏など登場人物の容姿や衣装、舞台のセットといった演出がデザインされ、浮世絵師の図像と歌舞伎演出の双方向的な影響関係の一端をも垣間見せるのです。

このように当時の文化社会に大きな影響をもたらした三代豊国の『修紫田舎源氏』図像ですが、その端的な特徴に主人公・足利光氏の鬘の形があります。

三代豊国は、光氏の鬘を先端が海老の尻尾のように二つに分かれた「海老茶筌鬘」という独特の形として

描きました。この鬘の形でもって、群像の中にあつても、光氏の存在を一目で判断することができまふ。この鬘は三代豊国が自ら考案したものと言われますが、上の肉筆浮世絵に描かれた、梅の前で笛を吹く人物の鬘にも、海老茶筌鬘の特徴的な形が確認でき、この作品の主題が足利光氏であることを伺わせます。また、源氏絵が流行する中、様々な役者の似顔による足利光氏図が描かれたこともあり、本作も同様に役者似顔による光氏図であると推測されますが、現段階ではこの肉筆の似顔となつている役者を特定するには至っていません。しかし、落款から豊国(三代)を襲名した弘化元年以降の作であることは間違いないでしょう。

桜まつり期間中という短い展示期間ではありますが、幕末浮世絵を支えた三代豊国の希少な肉筆浮世絵を、ぜひご覧にいらしてください。

(郷土博物館専門員)

## 博物館の桜まつり

三月二十八日(土)～四月六日(月)

☆期間中は入館料無料。

☆月曜日も臨時開館。

☆土日は先着二百名に記念品贈呈。

☆博物館前より花めぐりバス運行。